

## 第 113 回 東京都大田区の銅像探索 (その 2)

筆者：林 久治 (記載：2020 年 1 月 8 日)

### (1) 前書き

私 (筆者の林) は [Random Walks \(乱歩\)](#) という題名で [偏屈老人 \(林久治\) の気侷な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」という意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいたので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

私は昨年 (2019) 年の 12 月 24 日に東大農学部で銅像探索を行い、[111 回の記事/f](#) でその探索記を記載した。2020 年の新年を迎え、私は 1 月 2 日に池上本門寺に初詣に行き、そのついでに大田区の銅像探索を行った。[前回の記事/f](#) はその探索記 (その 1) である。本稿はその探索記 (その 2) である。なお、本稿においては、資料の記述を **緑文字** で、私 (林) の意見や説明を **青文字** で記載する。



図 1. 大田区の鉄道網 本図は、[2\) のサイト/1](#) より借用。

## (2) 大田区の鉄道網

私は、1960年3月に徳島市内の高校を卒業し、同年4月に東京都内の大学に入学した。それ以来60年、私は23区内北部に住んでいる。特に、この40年間は、23区の西北の隅にある練馬区大泉学園町に住んでいる。大田区には、羽田空港を除いては殆ど行ったことがなく、土地勘が全くない。大田区は東急電車の路線が複雑に走っているのので、私にはそれを乗りこなすのが容易ではない。図1に、その鉄道網を示す。

その中で、都営地下鉄が唯一、西馬込駅まで乗り入れている。私は東京のシルバーパスを持っているので、今回は西馬込駅から大田区に足を運んだ。探索記を私が探索した道順で書くと、経路は複雑になるので、説明しやすいように次の順番で紹介する。

[前回の記事/f](#)：池上本門寺→大坊本行寺→沼部駅前の東光寺

今回の記事：洗足池畔の御松庵妙福寺→洗足池畔の千束八幡神社→馬込の萬福寺

私が大田区で銅像探索を行った動機は次の通りである。①[日本の銅像探偵団/](#)のサイトに「指名手配銅像」の欄があり、本サイトに未収録の銅像を募集している。②本欄の東京都の項に「池上幸健（東京都大田区大坊本行寺）」が手配されており、本像の撮影を目指した。③本行寺は本門寺の塔頭であり、当地の周辺で本サイトに未収録の銅像を調査すると、他にも有名な銅像が多数未収録のまま放置されていた。

本節の初めに書いたように、私は大田区の土地勘が全く無かった。したがって、本探索を行うまで、当地に本門寺のような歴史のある大寺院があることさえ、全く知らなかった。そこで、この正月に本門寺に初詣に行こうと考えた次第である。洗足池には行ったことがあったかも知れないが、池の記憶は全く残っていない。

## (3) 洗足池湖畔の日蓮聖人像

私の事前調査で、洗足池湖畔の千束八幡神社に名馬「池月」の銅像があることを知っていた。そこで、池月像を見ようと洗足池駅から湖畔に行くと、次ページの図2上に示すような案内図があった。それを見ると、湖畔には日蓮聖人像があることを発見した。これは想定外で、私は「まさか、ここに日蓮像があるとは」思わなかった。「一般の日蓮宗の寺院によくある陳腐な日蓮像ならつまらない」と思いつつ、一応この日蓮像を見に行った。

案内図に従って御松庵妙福寺に行くと、「日蓮上人袈裟掛けの松由来」という案内板があった。その写真を図2下に示す。[前回の記事/f](#)で、私は「日蓮上人がこのあたりを旅行中、容体が悪くなり、池上宗仲の館で入寂した」ことを紹介した。本由来書によれば、「日蓮上人は、池上宗仲の館に行く直前に、洗足池で休息して足を洗った」との言伝えがあるようだ。

私は阿波の生まれで、関東の故事に疎いので、この話をここで初めて知った次第である。昔の人々は現代人と比べて大変悠長だったらしく、この程度の故事に感動して、江戸時代には洗足池は大変景色のよい名勝地として名を馳せたそうである。4ページの図3上に現在の袈裟掛けの松を示し、図3下に歌川広重が描いた「名所江戸百景」の「千束の池袈裟懸松」を示す。本図は[4\) のサイト/1](#)からの借用で、本サイトは洗足池周辺の紹介に優れている。(本文は5ページに続く。)



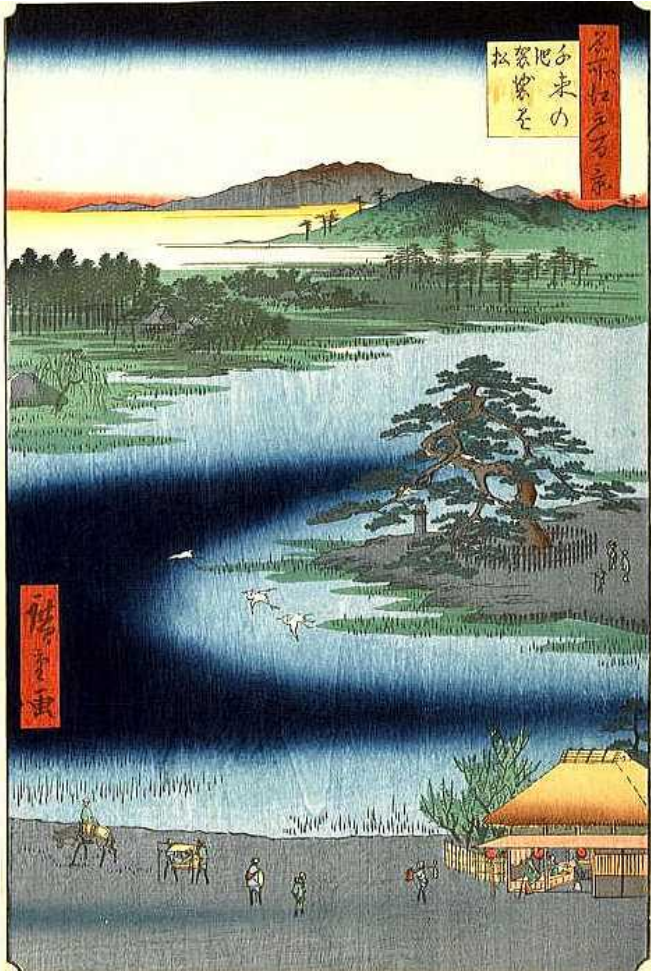


図3.  
 上：現在の日蓮上人袈裟掛けの松（3代目）、  
 下：歌川広重が描いた「名所江戸百景」の「千束の池袈裟懸松」。  
 本図は、[4\) のサイト/1](#)から借用した。

袈裟掛けの松の隣に、妙福寺があった。ウィキペディア（大田区の妙福寺）には次のような説明がある。

当寺院は、もともとは洗足池の池畔にあった鎌倉時代に創建された「御松庵」という庵に由来する。御松庵は日蓮ゆかりの草庵である。日蓮が1282年に身延山から、武蔵国（現在の東京都）・池上にある池上宗仲の館（現在の池上本門寺）に向かう途中に、近隣の大池（千束池。現在の洗足池）にさしかかった。その際日蓮はここで休憩を取り、傍の松の木に法衣をかけて（後にその松は「袈裟かけの松」と言われた）、池の水で手足を洗った。（これに因んでこの池を洗足池と言われるようになった）すると、池から七面天女が現れたという。後にこのことを記念しようと七面天女を安置するお堂を建てたのが「御松庵」のルーツである。一方妙福寺は日慈が、現在の中央区の日本橋馬喰町に寛永年間以前に草創した寺である。しかし、1657年の明暦の大火のなどで本堂などが焼失し、浅草に移転した。その後、1923年の関東大震災でまたも焼失して、1927年に当地に移転し、既存の御松庵を合併という形で、再建された。

当寺院の境内に日蓮立像があった。その写真を図4に示す。本像は、特別立派ではなかったが、粗製乱造型でもなく、フツウの日蓮像であった。台座の正面には「立正安國」と刻まれており、他面には「願はくばこの妙法により一切衆生の苦患を救ひ人々の願ひを満足せしめ人類永遠の幸福を念じ世界平和を祈るものである日蓮上人七百年遠忌 寄進人 千葉県山武郡九十九里町作田 牧野らく 昭和54年10月18日建立」と刻まれていた。



図4. 妙福寺境内にある日蓮立像

図4が示すように、立像の右手に石碑があり、そこには次の様に書かれていた。

(5) のサイト/mより引用)

日蓮上人銅像建立の由来

牧野らくは 明治22年 千葉県東金市に生まれ 幼き頃より 孝心厚く 日蓮上人の偉大なる徳に感動し 太陽を崇め 先祖を尊び 20才頃より 靈感を授り修行する昭和12年5月 身延山参拝の帰路 御松庵に立ち寄り 冠水し おみくじを引き 8年間誰人にも授からなかった大吉1番を戴き感激にうたれ 神通力の妙を会得し 難行にもめげず御題目を唱え続け 万病に苦しむ人々を 救済して 信仰を広める七百年遠忌を目標として ここに 信者の皆様方の御協力を仰ぎ 91才にして 永年の念願を達成したものである 昭和54年10月吉日 牧野一子

私は日本の仏教界には批判的ではあるが、本石碑を読んで牧野女史の素朴な宗教心に感動した。従って、この日蓮像は一般の日蓮宗寺院にあるような陳腐なものではない。以上の資料により、本像の概要は次の通りである。

日蓮聖人像

設置場所：大田区南千束・御松庵妙福寺（洗足池そば）

建立時期：1979年10月18日

制作者：老子製作所

寄進者：牧野らく（千葉県山武郡九十九里町）

設置経緯：日蓮聖人は晩年（1282年）、体調が思わしくなく常陸の国に湯治に行かれる途中、池上宗仲邸に訪問する直前に、ここ洗足池に立ち寄られたそうです。近くの松に袈裟を掛け、池で足を洗われたという逸話があります。牧野女史は、若い頃から日蓮宗の信徒として活動され、この御松庵にご縁があったそうです。七百年遠忌を目標に日蓮聖人像を当地に建立することを計画してきたが、91才にしてやっと、念願を達成したそうです。

(4) 千束八幡神社の池月像

洗足池の日蓮像の対岸にある千束八幡神社に池月像が設置されている（図2上を参照）。八幡神社の写真を次ページの図5上に示す。当社は小高い岡の上に建てられた小さい神社ではあるが、初詣の参拝人が長蛇の列をなしていた。地元では、有名な神社なのであろう。

当社の掲示板には、当社の由来が次のように書かれている（6) のサイト/1)。

當社は千束八幡神社と稱し、平安前期の貞観二年豊前国宇佐八幡を勧請し往時の千束郷の總鎮守としてこの巒上に創建せられ、今日に至る。遠く千百余年の昔より、この地の氏神として尊崇せられ、普く神徳を授けてこらる。承平五年、平将門の乱が起る。朝廷より鎮守副将軍として藤原忠方が派遣せられたり。乱後忠方は池畔に館を構え、八幡宮を吾が氏神として篤く祀りき、館が池の上手に当たるに依りて池上氏を呼稱、この九代目の子孫が日蓮を身延から招請す、之池上康光なり。

又八幡太郎義家奥羽征討の砌、この池にて禊を修し、社前に額つき戦勝祈願をなし出陣せりと伝える。源頼朝も亦鎌倉に上る途次、この地を過ぐるに八幡宮なるを知り、大いに喜び此処に征平の旗幟を建つる哉、近郷より将兵集まりて、鎌倉に入る事を得、旗挙げ八幡の稱あり。名馬池月を得たるも此処に宿舎の折なりとの傳承あり。尚境内に武蔵国随一と云われし大松ありしが、大正十三年惜しくも枯衰し今はその雄姿を見るすべもなし。古

歌の「日が暮れて足もと暗き帰るさに霊に映れる千束の松」と詠まれて居り、老松の偉容が想像されよう。

斯の如く當八幡神社は城南屈指の古社にて亦名社なり。



図5.

上：千束八幡神社、

下：八幡神社境内の池月像。

当日は逆光のため、この方向からの撮影が一番適当であった。

八幡神社の境内に設置されていた池月像の写真を図5下に示す。台座には「名馬池月の由来」と「本像の設置者の名簿」が貼付されていた。後者の銘板を図6に示す。本銘板より、次のことが分かった。①設置者は「社団法人・洗足風致協会」。②碑文筆者は岸田勇。③馬像原作者は佐々木憲章。④本像の建立は1997年10月。

前者の碑文には、以下のように書かれていた ([7](#) のサイト/)。

治承4年(1180)源頼朝が石橋山の合戦に敗れて後、再起して鎌倉へ向かう途中ここ千束郷の大池(今の洗足池)の近く八幡丸の丘に宿営して近隣の味方の参加を待った。

或る月明の夜に何処からか一頭の駿馬が陣営に現われ、そのいなく声は天地を震わすほどであった。家来達がこれを捕えて頼朝に献上した。馬体はたくましくその青毛は、さながら池に映る月光の輝くように美しかった。これを池月と命名し頼朝の乗馬とした。寿永3年(1184)有名な宇治川の合戦に押領の名馬池月に佐々木四郎高綱が乗り、磨墨に乗った梶原源太景季と先陣を競い、遂に池月が一番乗りの荣誉に輝いた。と、史書に伝えられている。ここに名馬池月の銅像を造り、この名馬池月発生の伝承を永く後世に伝えようとするものである。

平成9年10月吉日 洗足風致協会創立65周年記念 社団法人 洗足風致協会

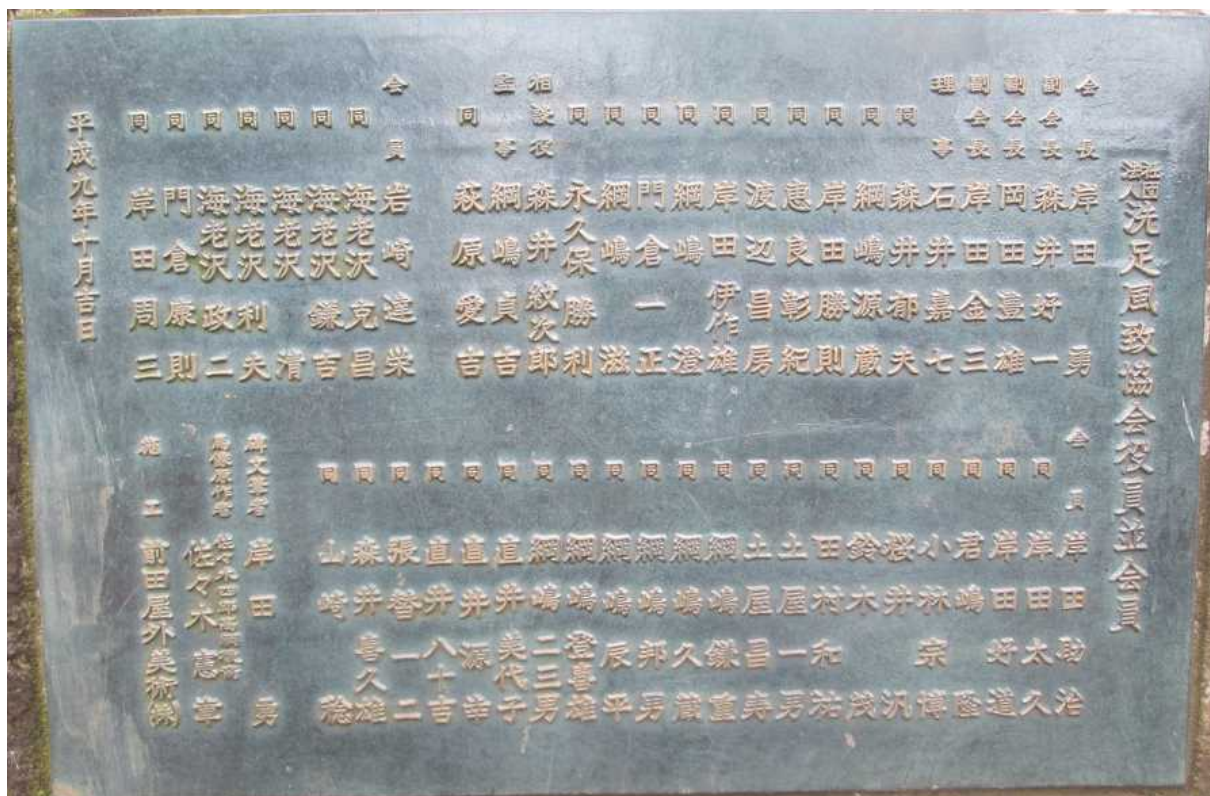


図6. 池月像の建立者名簿

以上の資料より、池月像の概要は次の通りである。

設置場所：大田区南千束2-23-10千束八幡神社

建立時期：1997年10月

馬像原型制作者：佐々木憲章

設置者：洗足風致協会（設立65周年記念）



設置経緯：池月（いけづき）は平安時代末期の名馬。当時、この一帯は馬の産地であった。1180年、源頼朝が石橋山の合戦に敗れて後、再起して鎌倉へ向かう途中ここ千束郷の大池（今の洗足池）の近く八幡丸の丘に宿営して近隣の味方の参加を待った。或る月明の夜に何処からか一頭の駿馬が陣営に現われ、そのいななく声は天地を震わすほどであった。家来達がこれを捕えて頼朝に献上した。1184年の宇治川合戦で、池月に乗った佐々木四郎高綱と磨墨に乗った梶原源太景季とが先陣を競い、遂に池月が一番乗りの荣誉に輝いたことは有名。

なお、馬像原型作者の佐々木憲章の略歴は次の通りである（[\(8\)のサイト/1](#)）。

1942年東京生まれ。1965年東京芸術大学卒業、1963年ニ科展初入選、1966年渡米留学、1969年ニ科展特選受賞、1980、82、84年高村光太郎大賞展受賞、1997年「池中の像」（大田区洗足池に設置）、2002年モニュメント「飛翔」（東北新幹線八戸駅に設置）。

### （5）萬福寺の磨墨像

池月のライバルであった磨墨の銅像も近くの萬福寺（大田区南馬込1-4-9-1）にあるので、私は磨墨像も探索した。萬福寺の周辺地図を図7に示す。私は西馬込駅から歩いて当寺に行った。付近の道路はかなり複雑ではあったが、博物館を目標にして行くと10分余りで行くことが出来た。



図7. 萬福寺の周辺地図  
本図は、萬福寺のHP  
([\(9\)のサイト/](#))より借用。

萬福寺のHP（[\(9\)のサイト/](#)）は当寺の概要を次のように書いている。

現在、曹洞宗寺院である萬福寺は慈眼山無量院と号します。建久年間（1190～99）大井村丸山の地に密教寺院として創建されました。開基は梶原平三景時公であったと伝えられています。元応2年（1320）火災にあい、第六代の梶原掃部助景嗣が居城とともに馬込へ移転したと伝えられます。天文3年（1534）鎌倉の禅僧明堂文竜が曹洞宗に改め新興し、現在の萬福寺へと続いています。本尊は阿弥陀三尊を祀っております。

なお、[\(9\)のサイト/](#)は「境内に梶原平三景時公の墓がある」と書いているが、磨墨像については触れていない。（本文は、11ページに続く。）



図8. 上：萬福寺山門と磨墨像、下：磨墨像

図8に萬福寺山門と磨墨像の写真を示す。本像の傍に、説明板があったので、その写真を図9に示す。本説明より、磨墨の紋所は鎌倉殿の「源氏の笹りんどう」である。



図9. 磨墨像の説明板

以上の資料より、磨墨像の概要は次の通りである。

設置場所：大田区南馬込1-49-1 萬福寺

建立時期：1986年秋彼岸会

制作者：不明

建立者：萬福寺護持会

設置経緯：磨墨（するすみ）は平安時代末期の名馬。当時、ここ馬込は馬の産地であった。磨墨は当地生まれとか、当地で亡くなったとかの言伝えがある。1184年の宇治川合戦で、池月に乗った佐々木四郎高綱と磨墨に乗った梶原源太景季とが先陣を競い、遂に池月が一番乗りの栄誉に輝いたことは有名。本像は、萬福寺創建八百年を記念して供養のため梶原家ゆかりの当寺に建立。当寺は、1192年に梶原景時（景季の父）が建立したのが始まり。

#### (6) 梶原一族の紹介

ここでは、ウィキペディアの記事などを用いて、梶原一族の概要を紹介する。

- ①宇治川合戦（1184年）で佐々木高綱（1160-1214）と先陣争いをした梶原景季（1162-1200）は、梶原景時（1140?-1200）の嫡男である。
- ②源頼朝は1180年に平氏に対して反乱を起こしたが、石橋山の戦いで敗北した。梶原景時は平氏の一門で、この時には平家軍に加わっていた。
- ③石橋山の戦いで敗北した頼朝は山中に隠れていたが、景時に居場所を発見された。
- ④しかし、景時は大将の大庭景親に「この山に人跡なく、向こうの山が怪しい」と景親らを導き、頼朝の命を救った。このことが縁で後に景時は頼朝から重用されることになる。
- ⑤1184年正月、景時父子は源義仲との宇治川の戦いに参陣。源義経配下の嫡男・景季は佐々木高綱と先陣を争い武名を上げた。戦後、源範頼・義経・安田義定らは戦勝を鎌倉へ報告したが、いずれも「勝ちました」程度の簡単なものであったところ、景時の報告書だけが義仲の討ち取られた場所、様子、おもだった敵方の武将の死者と討ち取った者の名前など詳細に戦果を記しており、頼朝はその事務能力・実務能力の高さを喜んだ。
- ⑥1185年正月、頼朝は義経の起用を決めて摂津国で軍を編成させ、讃岐国屋島の平氏の本営を衝かせることにした。義経の軍に属した景時は兵船に逆櫓をつけて進退を自由にすることを提案。義経はそんなものをつければ兵が臆病風にふかれて退いてしまうと反対。景時は「進むのみを知って、退くを知らぬは猪武者である」と言い放ち義経と対立した。いわゆる、逆櫓論争である。2月、義経は暴風の中をわずか5艘150騎で出港して電撃的に屋島を落として、景時の本隊140余艘が到着したときには平氏は逃げてしまっていた。景時は「六日の菖蒲」と嘲笑された（屋島の戦い）。
- ⑦1185年3月、義経は長門国彦島に孤立した平氏を滅ぼすべく水軍を編成して壇ノ浦の戦いを挑んだ。軍議で景時は先陣を希望したところ、義経はこれを退けて自らが先陣に立つと言う。心外に思った景時は「総大将が先陣なぞ聞いたことがない。将の器ではない」と愚弄し、義経の郎党と景時父子が斬りあう寸前になった。合戦は源氏の勝利に終わり、平氏は滅亡した。
- ⑧景時は「判官殿（義経）は功に誇って傲慢であり、武士たちは薄氷を踏む思いであります。そば近く仕える私が判官殿をお諫めしても怒りを受けるばかりで、刑罰を受けかねません。合戦が終わった今はただ関東へ帰りたく願います（大意）」と頼朝に報告している。義経と景時に対立があったことは確かである。この報告がいわゆる「梶原景時の讒言」と呼ばれている。
- ⑨1185年10月、頼朝は土佐坊昌俊を義経暗殺に京に派遣したが、昌俊は返り討ちにあう。義経は「頼朝追討の院宣」を得て行家とともに挙兵するが兵が集まらず失敗し、京を落ちて奥州平泉の藤原秀衡のもとへ逃れるが、1189年に秀衡の死後その跡を継いだ藤原泰衡に殺された。
- ⑩頼朝の死後（1199年）、頼家の元でも継続して権力を振るう景時に対して、御家人達の不満が噴出し、頼家に「景時追放」の連判状を差し出した。景時は弁明せずに一族とともに所領の相模国一ノ宮の館に退いた。
- ⑪1200年正月、景時は一族を率いて上洛すべく相模国一ノ宮より出立した。途中、駿河国清見関にて偶然居合わせた吉香友兼ら在地の武士たちと戦闘になり、同国狐

崎にて嫡子・景季、次男・景高、三男・景茂が討たれ、景時は付近の西奈の山上にて自害。一族 33 人が討ち死にした。（梶原景時の変）

⑫梶原景時の変で滅ぼされた梶原一族のうち、景時の孫景望が鎌倉幕府に赦され、旧領の大井村を与えられた。1320年、火災により大井にあった萬福寺は焼失し、ときの当主梶原景嗣が馬籠村（現在の太田区馬込）に寺を再建し、居城も馬籠に移した。



図 10. 宇治川合戦における佐々木高綱と梶原景季との先陣争いの図  
本図は、[10\) のサイト/1](#)より借用。

#### 参考資料

- 1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト：<http://www.takeda2001.jp/map.html>
- 3) のサイト：[http://www.komei.or.jp/km/ota-tamagawa-hidetoshi/2018/02/23/h301\\_1senzokuike/](http://www.komei.or.jp/km/ota-tamagawa-hidetoshi/2018/02/23/h301_1senzokuike/)
- 4) のサイト：<https://jinjamemo.com/archives/post-22497.html>
- 5) のサイト：<http://burari2161.fc2web.com/nitiren.htm>
- 6) のサイト：<https://jinjamemo.com/archives/post-22497.html>
- 7) のサイト：<https://genpei.sakura.ne.jp/genpei-shiseki/ikeduki-douzou/>
- 8) のサイト：<http://www.shc.u-tokai.ac.jp/about/gakka/geijyutsu/bijyutsu/teacher/sasaki.shtml>
- 9) のサイト：<http://www.manpukuji.or.jp/>
- 10) のサイト：<https://aucfree.com/items/h380689541>